

奄美大島宇検村における墓の共同化に関する文化人類学的研究

著者	福ヶ迫 加那
ファイル(説明)	博士論文要約 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第34号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029564

平成29年2月8日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 福ヶ迫 加那

学位論文題目

奄美大島宇検村における墓の共同化に関する文化人類学的研究

(An Anthropological Study on Communalization of Tombs in Uken Village, Amami Island)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

奄美大島宇検村において1970年代から共同納骨堂の建設という現象が集中的に見られることから、本研究の目的は、第一に、地域社会が墓とどのように関わっているのかという視点から、共同納骨堂の建設過程、維持管理と利用状況を記述すること、第二に、建設を支える要因を、対象地域の社会的コンテクストに基づいて文化的、社会構造的、経済的観点から明らかにすること、第三に、他出者側から見た共同納骨堂がもたらす変化とは何かということ、墓の共同化という視点から考察することにある。

2. 本論文の構成

論文全体は、序論と考察、結論のほかに、5章からなる。

「序論」では、研究目的の他に、先行研究、研究方法、論文構成について述べる。先行研究では、墓をめぐる問題として、1990年代以降に登場してきた新しい共同性に基づく墓の形態に関する研究、所有形態別、地域別にみた1990年以前の共同墓の研究、最後に奄美大島の共同墓に関する研究を整理する。すでに宇検村の芦検集落の共同納骨堂に関する先行研究があるが、宇検村全体の動向と現状を把握した研究がないため、自らの研究を共同納骨堂を建設した集落と建設しない集落を含めた、共同納骨堂建設をめぐる動態を捉えようとした研究と位置付ける。

第1章「奄美大島宇検村における共同納骨堂の建設」では、調査地と葬墓制の概況を示したあと、宇検村全14集落のうち共同納骨堂のある9集落について、その建設過程と利用状況を整理する。建設要因として、家墓建立の経費軽減、無縁仏や継承不安、墓参や管理利便化の希求、建設が相次ぐ状況を想定する。また、各集落に共通するのは、墓に関する問題を集落の問題として捉え対処しようとする姿勢であり、家族・親族よりも確実性が高い集落がサポート役として選ばれていることを指摘する。

第2章「宇検村田検集落と墓の共同化」では、田検集落を取り上げ、最初期に建設を成

度の高さにある。申請者は、調査対象の宇検村の全集落で聞き取り調査を行ったが、なかでも、共同納骨堂の建設が最も古い田検集落では半年間住民と生活を共にする中で集中的な調査を行う一方、最初の建設から 25 年後になる最も新しい湯湾集落の共同納骨堂の建設についても掘り下げた調査を行い、今回、提示できなかった多くの資料も含めて、各種の貴重な資料を発掘・入手し整理した手腕は見事である。また、宇検村という奄美大島の一行政村で集中的に見られた共同納骨堂の建設という全国的にも珍しい現象を取り上げて体系的に研究した点は、今後さらに少子高齢化、過疎化が加速することが予想される日本社会の墓の問題を考える上では、先駆的研究として、一つの研究モデルを提示できた点が評価される。

4. 問題点

まず、宇検村の事例をどこまで一般化可能かという問題や、墓の耐久性を求める集落の発想の背景には何があるのかという点についての議論が十分でないこと、さらに、事例の数が多しだけに、整理の工夫が足りないことが理解の妨げになっている点や、考察で「共同化」についての掘り下げた議論が見られないことなどが指摘された。

5. 総合評価

本論文には、以上のような幾つかの問題点は存在するが、現地でかなりの時間を費やして得られた調査資料に基づいて緻密な議論を展開していることや、事例の新奇性と先駆性に論文としての独創性が見られること、さらに、墓の共同化という問題に新たな知見を提示し、その研究の可能性の幅を広げることができた点は高く評価できる。よって、審査員全員が一致して、博士（学術）の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合 ・ 否

審査委員

主査 (氏名) 梶原秀雄

副査 (氏名) 渡辺芳郎

副査 (氏名) 萩野誠

副査 (氏名) 西村明